人間文化論叢　第9巻　2006年

デイヴィドソンのアクラシア論

山　本　麻衣子*

Davidson on Akrasia

YAMAMOTO Maiko

abstract

An akrates acts against his own judgment intentionally, i.e. according with his own judgment. How can this be possible?

In his paper "How is Weakness of the Will Possible?", Davidson explained as follows. The all-things-considered judgment is distinct from the unconditional judgment. The unconditional judgment is identical with intention, while the all-things-considered judgment is based on three syllogisms : the syllogism of pleasure, the syllogism of reason, and the syllogism of will. An akrates acts intentionally since he acts on an unconditional judgment, whereas he acts akratically since he acts against an all-things-considered judgment.

In this paper, I argued that Davidson's theory has four difficulties. (1) One's will cannot be expressed in the form of syllogism. (2) It is impossible for an akrates to make the syllogism of pleasure. (3) Davidson doesn't explain the fact that the akratic action, which is irrational, involves no inferential mistake. (4) We cannot explain akrasia correctly if we identify the unconditional judgment with intention.

Keywords : Davidson, akrasia, intention, weakness of the will, action

Ⅰ．デイヴィドソンのアクラシア論の概要

【アクラシアの問題】

デイヴィドソンの定義に従うと、ある行為xがアクラシアの行為であるとされるのは、次の三つの条件がすべて成り立っている場合に限られる［Davidson, p.22］[(1)]。

(a) 行為者はxを意図的に行っている。

(b) 行為者は自分に可能な別の行為yがあると信じている。

(c) 行為者は「すべての事情を考慮すればxを行うよりもyを行うほうが善い」と判断している。

たとえば、テレビを見るより勉強するほうが善いと判断しながらテレビを見る場合や、喫煙するより禁煙するほうが善いと判断しながら喫煙する場合、これらの行為はアクラシアの行為であると考えられる。このような現象は日常よく見られるものであり、私たちがアクラシアを経験していることを否定することは難しいように思われる。しかし一方で、次の意図的行為に関する原則P1とP2が誤っていると考えることも難しいだろう。

<P1> 行為者がyを行うよりxを行うことを欲し、かつ彼がxとyのどちらでも自由に行いうると信じているとき、

キーワード：デイヴィドソン、アクラシア、意図、意志の弱さ、行為

＊平成17年度生　比較社会文化学専攻

もし彼がｘかｙを意図的に行うのであれば、彼はｘを意図的に行うだろう

<P2> もし行為者がｙを行うよりｘを行うほうが善いと判断するならば、彼はｙを行うよりｘを行うことを欲する

そして、P1とP2から、次のことが導かれる。

「行為者がｙを行うよりｘを行うほうが彼にとって善いと判断し、かつ彼がｘとｙのどちらでも自由に行いうると信じているとき、もし彼がｘかｙを意図的に行うのであれば、彼はｘを意図的に行うだろう」

この意図的行為に関する原則が正しいのなら、「ｙのほうがｘより善い」と判断しながら、それに反して意図的にｘを行なうことは不可能であるように思われる。つまり、アクラシアの可能性を認めることと意図的行為の原則を受け入れることは、両立しないように思われるのである。これがデイヴィドソンの考えるアクラシアの問題である。

この問題を解決する方法は三つあると考えられる。

[A]「アクラシアは起こりえない」と考える。

この方法で問題を解決しようとした代表的な哲学者はソクラテスである。彼は次のように考えた。知識は支配的な位置にあるものであり、知識に反して行為することは不可能である。また、自ら進んで自分にとって悪であるものを選ぶ人はいない。それゆえ、何が自分にとって善い行為なのかを知っているなら、人は必ずその行為をするはずである。もしも自分にとって悪である行為を自ら選ぶ人がいるなら、その人は自分にとって何が善なのかを本当には知らないのである。ゆえに、私たちがアクラシアだと思っている現象は実際にはアクラシアではなく、単に行為者の無知による行為にすぎない［Plato, 353c ff.］。

しかし、このソクラテスの解決は成功していない。

第一に、ソクラテスの言う「本当の知識」とは何なのか。ソクラテスの説明では、結局のところ、ある知識に行為が従うならその知識は本当の知識であり、行為が従わないなら本当の知識ではないとしか言えない。「本当の知識」の基準がどう行為するかということにあるなら、ソクラテスは何も説明したことにはならない。

第二に、アリストテレスが指摘したように、アクラテースが持っているものが知識ではなく、単に「ある行為が善である」という思い込みであったとしても、アクラシアの問題は変わらずに生じるだろう［Aristotle, 1146b25-31］。アクラシアとは、自分が善いと考えている行為を行わないことであり、その考えが知識なのか単なる思い込みなのかは関係がない。だから、デイヴィドソンも、「知識」ではなく「判断」を使ってアクラシアを定義しているのである。判断や思い込みの場合にもアクラシアが起こりうるという肝心な点をソクラテスは見逃している。

[B] 意図的行為についての原則に誤りが含まれていると考える。

たとえばミールは、原則P2が誤りであると主張する［Mele, p.49］。彼は、「欲する」には二つの意味があると考える。一つは評価的な意味であり、もう一つは動機的な意味である。評価的意味で「ｘよりｙを欲する」と言う場合、これは「ある価値に照らして、ｘよりｙを高く評価する」ということを意味するが、一方、動機的意味で「ｘよりｙを欲する」と言う場合は「ｘのための理由よりｙのための理由により強く動機づけられる」ということを意味する。行為者が、評価的意味においてｘよりｙを欲していたとしても、彼が動機的な意味においてｘよりｙを欲するとは限らない。そのため、より善いと判断された行為と、より強く欲求される行為が一致しないことがある。これらが一致するかどうかは行為者のself-controlの度合いによる。これがミールの主張である。

これに対しては、ピーコックの批判が当てはまると思われる。ピーコックが言うように、一般に、いくら欲求の種類を区別してもアクラシアを説明することはできない［Peacocke, p.51］。なぜなら、評価的欲求であれ動機的欲求であれ、アクラシアの行為が最も強い欲求に従っていることに変わりはないからである(2)。アクラシアは他の行為と同様に、最も強い欲求に従っているのに、なぜアクラシアだけが不合理とされるのかをミールの立場では説明することができない。

[C]「アクラシアの行為が可能であるということは、意図的行為の原則と実際には矛盾していない」ということを示す。

デイヴィドソンは、この方法による問題解決を目指している。以下では、彼のアクラシア論を紹介し、それが本当にアクラシアの問題を解決できているかどうかを吟味する。

【デイヴィドソンによるアクラシアの説明】

≪デイヴィドソンのアリストテレス批判≫

デイヴィドソンによるアクラシアの説明には、実践的三段論法が用いられる。まず彼は、実践的三段論法の結論と行為が同一であるという考えを否定することから始める。

「アリストテレスは（実践的三段論法の）結論を導くことと行為することをあからさまに同一視する。すなわち、彼は、＜結論は行為である＞と述べるのである。しかし、もちろん、意図的行為と実践的推論に関するこの説明は、アクラシアの行為が存在するという想定と矛盾する。私の考えでは、アリストテレスの理論の大筋をこのまま維持する限り、彼はアクラシアの行為について満足のいく分析を提出することはできない、と認めざるをえない。」[Davidson, p.32]

このアリストテレス解釈は誤りである。アリストテレスは「妨げられることのない場合であれば、人はこれ（結論）を同時に行動に移す」[Aristotle, 1147a30] と言っている。「妨げられることがなければ結論を行動に移す」ということは、「もしも妨げられた場合には結論は行動に移されないことがありうる」ということを含意する。結論と行為が同一のものであるならば、このようなことは不可能である。また、彼は、アクラテースは「推論はしてもその推論したところを情念のゆえに守り通せない人々」[Aristotle, 1150b18] だと説明している。したがって、アリストテレスは、結論と行為が同一のものだと主張しているのではなく、結論に反する行為の可能性を認めていたと解釈しなければならないだろう(3)。

しかし、実践的三段論法の結論と行為が同一であると考えるとアクラシアの行為を説明できない、というデイヴィドソンの主張は正しいと思われる。アクラシアの場合には、甘いものを食べている人でも、「甘いものは食べるべきではない」「これは甘いものである」「ゆえに、これは食べるべきではない」と推論している。アクラシアの行為は、この推論の結果に反した行為であるので、もしも実践的三段論法の結論が行為と同一だと考えるなら、アクラシアの可能性を認めることができなくなるのである。

≪快楽・理性・意志の三段論法≫

実践的三段論法の結論と行為が同一であると考えるなら、一つの行為に関わる実践的三段論法は一つだけである。しかし、デイヴィドソンは結論と行為は同一ではないと考え、アクラシアには三つの実践的三段論法が関与すると主張している。

一つ目は快楽の三段論法である。デイヴィドソンは、行為者の持つ理由、すなわち欲求（賛成的態度）と信念によって引き起こされる行為を意図的行為であると考えている [Davidson, p.3-19]。そのため、すべての意図的行為には実践的三段論法を形成することができると考える。「ケーキを食べないほうが善い」と判断しながら欲望に負けてケーキを食べる行為も意図的行為である。この場合、欲求（快楽を追求すべきである）と信念（ケーキを食べれば快楽が得られる）から行為（ケーキを食べる）を導く三段論法が存在する。これを「快楽の三段論法」とする(4)。

二つ目の実践的三段論法は、理性の三段論法である。アクラシアの場合に特徴的なのは、行為者に葛藤があるということである。葛藤が生じるためには、アクラテースが実際の行為とは別の行為についても「善い行為である」（たとえば「ケーキを食べないほうが善い」）と判断している必要がある。この判断を導く三段論法を「理性の三段論法」とする。

しかし、この二つだけではアクラシアを説明するのに不十分であるとデイヴィドソンは主張する。理性と快楽の二つの三段論法が存在していたとしても、それらを比較し、一つにまとめようとするもの(5)がなければ葛藤は起こりえないからである。そして彼は、アクラシアにおける葛藤を説明するために、「意志の三段論法」をつけ加える。

彼はこれら三つの実践的三段論法を用いて、次のようにアクラシアの行為を説明する。

＜理性の側＞	＜快楽の側＞
(M1) いかなる姦淫も法に反する	(M2) 快楽を追求すべきである
(m1) この行為は姦淫の行為である	(m2) この行為は快楽をもたらす
(C1) この行為は法に反する	(C2) この行為を追求すべきである

＜意志（良心）＞
(M3) M1 かつ M2
(m3) m1 かつ m2
(C3) この行為は悪い

≪一応≫

これはアクラシアの説明としてはまだ不完全である。なぜなら、このままでは（C2）と（C3）という矛盾した結論が残ったままになってしまうからである[6]。デイヴィドソンは、アクラシアは行為者の推論の誤りによるものではないと考えている。したがって、行為者が同時に持つ信念のうちに矛盾が含まれていないことを示さなければならない。

この矛盾を解消するために、デイヴィドソンは、「一応（prima facie）」という概念を導入する。ここで、「一応」は、命題相互を関係づけるものであり、「一応、p ならば q」とは、「p ならば q」という p と q との関係が一応成立するということを意味すると考えられている。このとき、「一応、p ならば q」が成り立っており、かつ p であったとしても、このことから「q である」ということは無条件には導かれない。「一応」の命題では、modus ponens は成り立たないのである。「一応」を加えると、理性の三段論法は次のようになる。

(M6) pf（x は y より善い，x は姦淫を差し控えることであり y は姦淫の行為である）
(m6) a は姦淫を差し控えることであり b は姦淫の行為である
(C6) pf（a は b より善い，（M6）かつ（m6））

ここで pf（p，q）は「一応、q ならば p」と読む。同様に、快楽の側の三段論法の結論は

(C7) pf（b は a より善い，（M7）かつ（m7））

となり、意志の三段論法の結論は

(C8) pf（a は b より善い，e）

となる。(C8) の e とは（M6）、(m6)、(M7)、(m7) を併せたもの、すなわち x と y の行為選択に関係するすべての理由を指す。このとき（C6）、(C7)、(C8) は互いに矛盾しない。これによって、アクラテースが推論の誤りを犯しているわけではないということが説明できる。

≪意図≫

しかし、(C6) の「(M6) かつ（m6）であるなら」((C7) も同様）や、(C8) の「すべての事情を考慮すれば」といった条件つきの判断からは行為は起こらない。行為につながるのは無条件的判断（＝意図）のみである、とデイヴィドソンは考えている[7]。通常であれば、行為者は (C8)「一応、すべての事情を考慮すれば a は b より善い」から「a は b より善い」という無条件的判断を導き、意図的に a を行うが、アクラシアの場合には、行為者は（C8）と判断しながらも（C7）から「b は a より良い」という無条件的判断を導き、これに基づいて b を行うのである。デイヴィドソンはこのようにアクラシアを説明し、行為者が矛盾した信念を持つことなくアクラシアに陥ることが可能であることを説明している。

≪問題解決≫

意図的行為の原則 P2 における「より善いという判断」とは、行為に直接結びつく無条件的判断である。アクラシアの行為も無条件的判断に基く意図的行為であり、P2 の原則には反していない。一方、アクラシアの行為が反するところの判断（アクラシアの定義（c）で言及されている判断）は、「すべての事情を考慮すれば」という条件つきの判断である。条件つきの判断は行為や意図とは矛盾しない。デイヴィドソンは、無条件的判断と条件つき判断の区別を明確にすることによってアクラシアに矛盾が含まれないことを示し、最初に提示した問題を解決したと考えた。

では、アクラシアはなぜ非難されるのか。アクラシアの行為は推論の失敗による行為ではない。したがって、アクラテースが非難されるのは、彼が推論を誤っていたり矛盾した信念を持っていたりするからではない。

デイヴィドソンの考えでは、アクラシアが非難されるのは、「関連するすべての入手可能な理由に基いて最善

と判断された行為を遂行せよ」という「自制の原則」に反しているからである。この自制の原則は、帰納的推論のための指導原理「関連するすべての入手可能な証拠が支持する仮説を信頼しなければならない」と同様のものであると考えられている。これらは論理には含まれないが合理的な人なら誰でも承認するような指導原理である、とデイヴィドソンは述べている［Davidson, p.41］。

帰納的推論の場合、「一応、すべての証拠（今までに見たすべてのカラスは黒い）に基けば、次に見るカラスは黒い」とき、指導原理に従って、「次に見るカラスは黒い」と判断すべきである。これと類比的に考えるなら、自制の原則とは、「一応」の判断から無条件的な判断（意図）を導くための原則であると思われる。自制の原則に従えば、「一応、手に入れられるすべての理由に基づけばaのほうが善い」と判断される場合には「aをすべきである」という意図が形成されなければならない。これに対し、アクラテースは、「一応、一部の理由に基けばbのほうが善い」という判断から「bをすべきである」という意図を形成し、bを行なう。アクラシアの行為は、すべての理由に基づいた判断ではなく、一部の理由に基づいた判断に従った行為である。そのため、アクラシアの行為は自制の原則に反した行為であり、この点でアクラシアは非難される、とデイヴィドソンは説明する。

Ⅱ．デイヴィドソンの解決の問題点

以上のようなデイヴィドソンの解決には、四つの問題点があると思われる。

［1］デイヴィドソンは、アクラシアにおける葛藤を説明するために「意志」が必要だと主張する。彼によれば、理性と欲望の二つだけでは単にそれらが対立しているということしか示せず、アクラテースの葛藤を説明できない。彼は、意志が理性と欲望を比較し、それらを一つの判断にまとめようとすることによって、初めて葛藤が生じると考えた。理性と欲望を一つにまとめるこの操作は、意志の三段論法として表現されている。

しかし、アクラテースが意志の三段論法で表されたような推論を行なっていると考えることは困難である。理由は二つある。

第一に、「意志」というものをデイヴィドソンが考えるように三段論法の形で表すことができるだろうか。三段論法が成り立つには、前提から結論を導き出すための推論規則が存在しなければならないが、意志の三段論法には推論規則が存在しないように思われる。

人は、金銭・美しさ・健康・名誉など様々なものに価値を見出しており、一つの行為を評価する基準も様々である。ある行為が美しさの面では高く評価されるが、金銭を基準にすると低い評価しか得られない、ということがしばしば起こりうる。一つの基準に照らして善い行為を決定することは容易である。たとえば金銭のみを考慮する場合は、金銭的な有利不利によって、より善いもの、より悪いものも必然的に決まる。しかし、複数の価値を考慮しなければならない場合には、何が最善であるかは必然的に決まるわけではない。

たとえば、aとbの二つの洋服があり、ある人が、美的評価ではaのほうが善く、金銭的評価ではbのほうが善いと判断したとする。このとき、この人がaを買ったとすると、それは正しい行為だろうか、誤った行為だろうか。この問題は、この人が美的価値を優先するのが正しいのか、それとも金銭的価値を優先するのが正しいのか、という問題と同じである。もしも意志の三段論法を行なうことにより、関連するすべての事情を考慮した結果、推論によって「美しさを優先させるべきである」という判断を導くことができるなら、この行為者は美的価値を優先させてaの服を買うことが正しいという答えを出すことができるだろう。しかし実際のところ、関連する事情をどれだけ詳細に知ったとしても、私たちは「どちらを優先させることが正しいのか」という問いに一つの明確な答えを持つことはできないように思われる。なぜなら、私たちは、何らかの事実から「ある価値を他の価値より優先すべきだ」という判断を推論によって導くことはできないからである。私たちは、どのような事情があった場合に美を優先すべきで、どの場合に金銭を優先すべきであるかということを決める明確な基準を持っていないのである。

このように、考慮する要素が美と金銭の二つだけの場合でさえ決定的な答えを導くことはできない。実際に選択が必要とされる場面では、より多くの価値が関係するため、何が最善であるかを推論によって決めることはさらに困難になる。その証拠に、私たちは、同じような状況になるたびに選択に迷ったり、その時々で「気まぐれ」によって異なる判断を下したりするのである。つまり、すべての事情から「ある行為をすべきである」という一

つの結論を導く規則は存在しない。実際、デイヴィドソン自身も、私たちは意志の三段論法の前提から結論を導く一般方式を知らないので、結論が論理的に出てくるわけではないと認めている［Davidson, p.38］。しかし、三段論法が成り立つためには、推論規則がなければならない。理論的推論であれ、実践的推論であれ、規則のないものを「推論」「三段論法」と呼ぶことは不当であると私は思う。したがって、デイヴィドソンが考える意志を三段論法の形で表すことは不可能であると思われるのである。

第二に、デイヴィドソンはアクラシアの葛藤を説明するために意志の三段論法が必要であると述べているが、彼はアクラシアの葛藤を誤解しているように思われる。彼の説明では、まず理性と快楽の対立があり、意志がそれらのうちの一方を選ぶときに葛藤が生じるとされている。しかし、アクラシアにおける葛藤はそのようなものなのだろうか。

私の考えでは、アクラシアに不可欠な葛藤は、「ある行為をすべきである」という最終的な結論に至る段階ではなく、その結論が導かれた後に、どの行為を行なうかを選択する段階で生じるものである。たとえば、理性と快楽を考慮した末に「このケーキを食べるべきではない」と判断しながら、それを食べてしまう場合を考えてみよう。このとき、行為者が理性と快楽の比較による葛藤の末に「このケーキを食べるべきではない」と結論したとしても、あるいは葛藤をまったく経験することなく「このケーキを食べるべきではない」と結論したとしても、どちらの場合にもアクラシアは生じうる。どちらの場合にも、結論を導いた後に、行為を選択する段階で葛藤が生じることが十分に可能だからである。理性と快楽の両方を考慮して「このケーキを食べるべきではない」という結論に至った後、その結論と、「それでも食べたい」という欲望との間で葛藤が生じうる。この葛藤こそがアクラシアに不可欠な葛藤であり、それゆえ、たとえ最終的な結論に至る前に葛藤があってもなくてもアクラシアは起こりうるのである。

行為者がどのようにして最終的な結論に至ったのかは、アクラシアにとって本質的な問題ではない。アクラシアに必要なのは、むしろその結論の後に生じる葛藤の方である。デイヴィドソンが意志の三段論法を用いて説明した葛藤はアクラシアには関係のない葛藤であり、したがって、アクラシアの説明に意志の三段論法を用いる必要はないと思われる。

[2] アクラテースが快楽の三段論法を行なうと考えることにも問題があるように思われる。

第一に、デイヴィドソンは欲望を快楽の三段論法として表現できると考えている。しかし、一般的に欲望を「～すべきである」という信念の形で表現することができるだろうか。たとえば、欲望には真偽の区別がないのに対し、信念には真偽の区別があるなど、欲望と信念には重要な違いがある。この区別を本格的に明らかにするには詳細な研究が必要であるが、ここでは次のことを指摘しておきたい。

欲望を直接的に表現するのは、「～したい」という表現である。この「～したい」と「～すべきだ」は明らかに異なる文法を持つ。たとえば、ダイエットしようとしている人が、一時的な欲望に負けてケーキを食べたとしよう。この場合、この人は「ケーキを食べたい」という欲望を持っているとは言えるが、「ケーキを食べるべきだ」と考えているとは言えないだろう。むしろこれは「ケーキを食べるべきではないと考えているが、ケーキを食べたい」と表現するようなケースなのである。このように、欲望を「～すべきだ」と表現することは、欲望の本質を歪めることになる。デイヴィドソンのように考えると、理性と欲望の対立は、信念同士の対立と同じことになってしまう。こういった点で、「快楽の三段論法」が欲望を表していると考えることには疑問があると私は思う。

第二の問題点は、快楽の三段論法の大前提にある。デイヴィドソンは、欲望に従って行為するアクラテースは「快楽を追求すべきである」という信念（快楽の三段論法の大前提）を持っていると説明するが、アクラテースがこのような信念を持つ人だと考えることはできない。なぜなら、「快楽を追求すべきではない」という信念を持つ禁欲主義者でも、欲望に負けてアクラシアに陥ることがありうるからである。デイヴィドソンの主張するように、欲望に従って行為する人が「快楽を追求すべきである」という信念を持っている人だとすると、禁欲主義を信奉するアクラテースは、「快楽を追求すべきではない」という信念と「快楽を追求すべきである」という信念を同時に持っていなければならないことになる。しかし、論理的な誤りを犯さない限り、これらを同時に持つことはありえない。しかるに、デイヴィドソンも認めるように、アクラシアは論理的誤りに基く行為ではないのである。

このことは、たとえ pf を用いたとしても同じである。一人の人が、

pf（x は善い、x は快楽を追求する行為である）

pf（xは悪い、xは快楽を追求する行為である）

という二つの判断を同時に持っていると考えることには無理がある。それゆえ、欲望に従って行為するアクラテースがいつも「快楽を追求すべきである」という信念を持っていると考えることはできないように思われる。

これらのことから、アクラシアには快楽の三段論法が関与していると考えるデイヴィドソンの立場は支持できないと思う。

[3] デイヴィドソンの説明では、「アクラシアは推論の誤りによる行為ではない」ということと「アクラシアは不合理な行為である」ことを整合的に説明することができない。

デイヴィドソンは、アクラシアの行為は「自制の原則に反している」という点で不合理であり、それゆえに非難されると説明している。そしてこの自制の原則は、帰納的推論のための指導原理「関連するすべての入手可能な証拠が支持する仮説を信頼しなければならない」と同様のものであると考えられている。

しかし、同じように原則に反しているとしても、帰納的推論の原則に反する場合とアクラシアの場合では大きく異なることがある。それは、アクラテースには、自分の行為がアクラシアの行為であるという自覚があるということである。私たちは「xをすべきではない」と判断し、同時に、自分は意志が弱い人間だと自責の念に駆られながらxを行なうことがあり、これが典型的なアクラシアである。このとき私たちは、自分が今行なっている行為が不合理なアクラシアの行為であることを自覚している。したがって、もしもデイヴィドソンの言うように、アクラシアの行為が自制の原則に反するという点において不合理なのであれば、このアクラテースは、行為するのと同時に、自分の行為が原則に反していることを自覚していることになる。この自覚を持つためには、まずアクラテース自身が自制の原則を認めていることが必要である。こう考えると、デイヴィドソンの論じたアクラテースは、「一応、すべての理由に基ければaをすべきである」かつ「一応、一部の理由に基けばbをすべきである」かつ「関連するすべての入手可能な理由に基いて最善と判断された行為を遂行せよ（自制の原則）」という三つの判断を下しながら、同時に「ゆえにbをすべきである」と無条件的に判断していることになる。

しかし、これはデイヴィドソン自身がアクラシアについて述べているもう一つの主張と矛盾する。なぜなら、アクラテースがこれらの判断を同時に持っているなら、推論の誤りを犯していることになるからである[(8)]。デイヴィドソンは、アクラシアが自制の原則に反するものであると主張する一方で、アクラシアは推論の誤りによるものではないと考えている。しかし、ここで示したように、自制の原則に反するということを認めるなら、アクラシアが推論の誤りであるということも認めなくてはならないのである。

では、アクラシアの行為が不合理であるのは、自制の原則に反するからではなく、その行為が意志の三段論法の結論に反しているからだと考えれば、デイヴィドソンのアクラシア論は救われるのだろうか。これでも問題は解決されないと私は思う。デイヴィドソンはアクラシアが推論の誤りによるものではないと示すために、「一応」という概念を用いて徹底して判断同士の間の矛盾を排除しようとしている。「一応」をつけ加えると、彼の狙い通り、意志の側の三段論法の結論「一応、すべての事情を考慮すればaはbより善い」と無条件的判断「bはaより善い」は矛盾しなくなるだろう。しかし、これらが矛盾し合うものでない以上、もちろん無条件的判断に基づくbの行為と意志の三段論法の結論も相反することにはならない。したがって、アクラテースの判断が「一応」の条件付き判断である限り、意志の三段論法の結論が行為に反していると主張することはできないのである。

行為が意志の三段論法の結論に反すると主張したいのであれば、アクラテースの持つ判断から「一応」を取り除かなければならない。しかし「一応」を取り除くと、デイヴィドソンが論じたように、行為者の持つ判断同士の間にも矛盾が生じてしまい、アクラシアが推論の誤りによるものではないということを説明できなくなってしまう。

このように、デイヴィドソンのアクラシア論では、「アクラシアは推論の誤りによるものではない」ということと「アクラシアは不合理な行為である」ということを整合的に説明することができない。これではアクラシアの行為を説明したとは言えない。

[4] デイヴィドソンのアクラシア論が [2]、[3] のような問題を回避できない原因は、根本的には彼が意図を無条件的判断と同一視していることにあると思われる。

意図が無条件的判断と同一だとすると、アクラシアの行為をする意図も無条件的判断の形で表されなければならない。このような無条件的判断は、何らかの実践的三段論法に基いた判断である。そのため、デイヴィドソンは、

アクラシアの行為を行なう意図を導く快楽の側の三段論法を想定したのである。しかし、快楽の三段論法を想定すると、[2] で述べたような問題が生じてしまう。

さらに、意図が無条件的判断であると考えると、[3] で述べたようにアクラシアがなぜ不合理なのかを説明することが困難になる。無条件的判断＝意図であり、これが（妨げられない限り）意図的行為につながるのであれば、アクラシアの不合理性を判断同士の間の不合理性で説明する以外に方法がなくなってしまう。実際にデイヴィドソンの説明でも、[3] で述べたように、「すべての事情を考慮すれば」という条件つきの判断、行為につながる無条件的判断、自制の原則、という判断同士の間に不合理があると考えなければならない。しかし、アクラテースの持つ判断同士の間に不整合があると考えると、アクラシアが推論の誤りによるものになってしまうのである。

デイヴィドソンは、すべての意図的行為には実践的三段論法が形成でき、意図的行為はその結論に基く行為であると考えている [Davidson, p.3-19]。そう考える限り、意図と判断を切り離すことはできない。しかしこのように考える必然性はない。

たとえば、アリストテレスはデイヴィドソンとは異なり、「行為の原因が行為者の中にあり、かつ無知でない場合、その行為は意図的行為である」と意図的行為を定義する。彼の「意図的」(hekousion) と「非意図的」(ākousion) の区別の基準には三段論法や判断は使われていない [Aristotle, 1109b30-1111b3]。彼の主張では、非意図的行為とは強制や個別的ことがらに関する無知のために行われる行為であり、反対に、意図的行為とは強制にも個別的ことがらに関する無知にもよらない行為のことである[(9)]。この区別に従えば、意図的行為が必ずしも判断に基いた行為である必要はない。アクラシアの行為が行為者の欲望に基く行為であるなら、これは行為者の中に原因がある行為であり、意図的行為に分類されるのである。

またピーコックは、意図と判断を同一視するデイヴィドソンの考えを批判し、意図とは傾向性であると主張する [Peacocke, p.55 ff.]。意図と判断が異なるものだと考えない限り、「アクラシアの行為は判断に反する行為だが、行為者の持つ判断同士の間には相反するところはない」ということを示すことはできない。

私の考えでは、アクラシアを説明するには、アクラシアのさまざまな性質を説明しなくてはならない。①アクラシアの行為は意図的行為である。②アクラシアの行為は判断に反する行為である。③アクラシアの行為者は推論の誤りを犯しているわけではない。④アクラシアの行為者の判断同士の間に不整合はない。⑤アクラシアは不合理である。意図と判断を同一視する限り、これらを説明することはできないと思う。

デイヴィドソンの問題点は、結局のところ、意志や欲望や意図を、判断と区別していないことに帰着するように思われる。デイヴィドソンのように、すべてを判断同士の関係の問題だと考える限り、アクラシアの問題は解決できない。意志、欲望、意図の本質を解明する本格的な研究によって初めてアクラシアの問題が解決できると思うのである。

【註】

(1) ホルトンは、アクラシアと意志の弱さを区別し、アクラシアが判断に反して行為することであるのに対し、意志の弱さは意図の変更であるとしている [Holton, 251-257]。この論文ではアクラシアと意志の弱さの区別については論じない。デイヴィドソンが扱っている現象を「アクラシア」と統一して表現する。

(2) 最も強い欲求とは、実行された行為が基づくところの欲求であるから、アクラシアの行為も最も強い欲求に基いているはずである。

(3) デイヴィドソンは、結論に反する行為が意図的行為であるとは認めないかもしれないが、後述するように、デイヴィドソンの意図的行為の定義には問題があると私は考えている。たとえば、アリストテレスの意図的行為の定義を参照。

(4) デイヴィドソンはアクラシアを欲望に負ける場合だけに限らないが、ここでは、理性に反し欲望に負ける例を考える。

(5) 実際には、これは実践的推論のことである。

(6) (C3) は、「この行為は追求すべきでない」と同義と考えられる。

(7) グライスとベーカーは、「すべての事情を考慮」してなされた判断は無条件判断と同一であるとしてデイヴィドソンを批判している [Grice and Baker, p.37]。

(8) これに対して、「一応」がついているから矛盾は含まれないと主張するなら、もっと困ったことになる。もし矛盾が含まれないなら、アクラシアは自制の原則に「反して」いないことになり、なぜアクラシアが不合理なのか説明できなくなってしまう。

(9) アリストテレスは、「強制による行為」のことを、その行為の原因が行為者の外部にあり、行為者が少しもそれに与っていない行為

であると説明する。たとえば、潮に流されて無人島へ行くというのは強制によるものであり、非意図的である。

【引用文献】

Aristotle, *Nicomachean Ethics.*

Davidson, Donald, "How is Weakness of the Will Possible?" and "Action, Reasons, and Causes", both in: Donald Davidson, *Essays on Action and Events*, Oxford University Press, 1980

Grice, Paul and Baker, Judith, "Davidson on 'Weakness of the Will'", in: Bruce Vermazen, Merrill B. Hintikka (ed.), *Essays on Davidson Actions & Events*, Oxford, 1985

Holton, Richard, "Intention and Weakness of Will", *The journal of Philosophy,* Vol.96, No.5, 1999

Mele, Alfred R, *Irrationality an Essay on Akrasia Self-Deception and Self-Control*, Oxford, 1987

Peacocke, Cristopher, "Intention and Akrasia", in: Bruce Vermazen & Merrill B. Hintikka (ed.), *Essays on Davidson Actions & Events*, Oxford, 1985

Plato, *Protagoras.*

(2006年12月1日受理)